

## 折り紙づくりは療法になりうるか

秋 山 幹 男 (心理学科)

### 1. どうして今折り紙なのか (その短い歴史)

ひよんな事から50歳半ばにして折り紙づくりに挑戦することになってしまった。取り組み始めてもう5年が経とうとしている。1998年4月から附属幼稚園の幼児教育研究施設長となり、4年間兼務の生活が続いたのである。1972年に本学に赴任してから切れることなく幼稚園に通っていたのであるが、ドブプリと園のすべてに関わったのはこの4年間が最初であった。3歳から6歳までの園児が発する心身のエネルギーのものすごさは、十分知っていたので何とか楽をしながら彼らと接する手段を考えてみた。そこで、折り紙ならば...と甘く妥協したのが間違いのスタートとなったのである(5年が過ぎようとしている今の本心は、とても有難いことと深謝している)。それまでにできる折り紙はツルを折ること位で、それも頭と羽根をどう折るのかいつも混乱していたのである。子ども達の反応はすさまじかった。「手裏剣をつくって!」「パッチンカメラをつくって!!」矢のような催促が私を待っていたのである。彼らの要求するものが何も折れないのである。しかしプライドはどうかして保ちたい。取り急ぎ、職員室にあった折り紙の本を開けて見た。これが難解なのである。いきなり作品の頁をめくっての挑戦である。折り方に一定のパターンがあることは、1年以上たってから気が付いた次第である(以前、ワープロに挑戦した時、まず先にマニュアル本を17時間読んでしまい、頭が混乱して器械に触れられなくなり、恐怖症になりかかった私なのである)。手裏剣は4人の先生に指導を乞うた。その中で一番分かりやすかったY先生のやり方を見習い、その夜は必死に折り続けたのである。翌朝、約束の園児に手渡した。その時の嬉しそうな顔が今でも忘れられない。パッチンカメラも教えてもらったが、奴さんから両手を共応させながらエイヤーと広げて変形させねばならなかった。これがまた難しいのである。理屈が分からずの試行錯誤である。でも、3・4回に一回はできたのである。これは、女の子達に喜んでもらった。6月の梅雨の季節には、野地教頭先生にピョンピョンガエルの折り方を習った。これは楽しい遊びに発展し、卵ホールでピョンピョン競争を始めた。

何よりの発見は、山口真「やさしいおりがみ百科」西東社 1993 が職員室の本棚にあったことである(今はボロボロに破れてしまい、職員室の保管庫の中に大事にしまい込んでいる)。難易度が3段階に分けて載せてあり、いろいろなジャンルに仕分けされていた。実に魅力に溢れた作品群であった。谷折り、かぶせ折り、山折りなどの言葉をまったく知ることなしの、これも試行錯誤の挑戦である。花と恐竜という何の脈絡なく、ただただ男の子と女の子に折ってあげたいという思いだけであったように回想している。特に恐竜は難しい折り方であったが、とにかく折り上げたのである。折れたら、数を上げることに徹した。とにかく本を見ないで手で覚えこもうと考えていた。

これがよかったのである。園児達はびっくりしてくれた。たくさんの折り上げられた作品は貰い手が多く、また、その一人ひとりの瞳は輝いたのである。こうなればすぐに嬉しくなる性格の私は、その笑顔と目の輝きを求めてのめり込んでいった。とにかく折れる作品のレパートリーを広げること努力する日々であつた。恐竜ランドを作って卵ホルのテーブルに置いたり、大きな模造紙の上にいろいろな動物を好きな場所にはりつけて園児達と文教動物園を創った。



図1 折り紙づくりの風景

これらの作品づくりには、包装紙を四角に切った紙を利用した。単なる思い付きではなく、市販の折り紙用紙は単色なので、花を折るには便利なのだが、面白味が私には感じられなかった。今考えてみると、包装紙の柄と色を活用できたことが長続きの最大の要因であった。確かに千羽鶴用の1000枚の小さな折り紙は単色であり、チューリップなどの花を折り葉をつけて鉢植えにする作品の場合にはとてもきれいで評判はそれなりによかった。しかし、それ以上に包みを解かれた包装紙にもう一度命を吹き込みたいという想いが幸いしたように思う。いろいろな店の包装紙のデザインと色合いは、これならゾウさん、キリンさん、トリケラトプス、ウサギさん、ねずみだ、ペンギンだ、イルカだ...と頁をめくりながらまずは紙を選択し、次に折り上げ、折り方をマスターすると手に覚えさせるように折りまくった。それを子ども達はどんだん家に持ち帰ってくれた。そのうちに、遅まきながら折り方には一定のパターンがあることにやっと気が付いた。鶴折り、兎折り、象折り（私の命名?）等である。また、折り紙づくりは紙1枚でなくてもよいことを、山口真氏の本から学ぶこともできた。二枚・三枚を組み合わせてもOKなのである。もちろん、糊もセロテープを使ってもよしである。ここまできると、自分なりのオリジナルを創り上げてみたくなる。最初は、セロテープと紙3枚で立体的な飛行機づくりに挑戦した。このきっかけは、ある園児が私に作品を依頼（注文）してくれたことから始まる。要求は、「じゃるを創って」であった。じゃる・ジャル・フアット・イズ・イットである。無い頭を働かせ、彼の言葉に耳を傾け続け、やっとのこと納得。ゆっくりと聞いてみた、“ジャルって飛行機のJALの事?”。彼は嬉しそうにコクリとうなずいたではないか。大きな紙、糊、セロテープを総動員させてJALが完成した。喜んでその作品を家に持ち帰ってくれた（お母さんはさぞかしびっくりして“ゴミが増えた”と嘆かれたのでは...と思った。しかし、結果はどうも逆であつたらしい）。次は、もっと大きな飛行機に取り組み、カレンダーの

紙、ガムテープを使った。翼にJALの字を尾翼に日の丸をカラーマジックで描き込み、ホールの柱にぶら下げた。すると、すぐに園児達の注目を集めたのである。先生方も迷惑そうな顔を見せずに無視してくれた。長いことぶら下げていると、翼が下がりだしてきた。それをポーッと眺めていたら、それが鯨に見えた。そこで、まず、図鑑を開き、鯨のスケッチをした。ついで、それを目の前に置き、じっくり鑑賞してみた。浮かんだのである、折り紙作品としてのクジラのイメージがである。これにはやはり3枚の大きさの違う紙を用意した。そして、出来上がったクジラに色を付けた。何でもそうであるが、そのように見えたなら成功なのである。ここまできた頃、保護者のTさんが注目してくださった。秋山先生の折り紙教室のスタートとなり、今でも細々とではあるが続いている。



図2 オリジナル作品

4年の間にたくさんの園児が私の側にやってきた。園にいる時に孤独であったことは一度もなかった。また、切れることなく少数の園児達はのめり込み、代々私の助手を務めてくれた。子どもにもよるのだが、ある程度継続してアシスタントをしそれなりに満足した後は、少しずつ遠のいていき他の遊びに移っていった。そして、彼らは熱中した遊びに対してリーダー性を発揮していく。それでも卒園後、幼稚園の運動会や秋祭りには顔を覗かせてくれる彼らの心の中に、しっかりと私との折り紙体験が記憶として残存していることを知った。本当に嬉しくなる。彼らは、秋祭りの時には私の担当するくじ引きコーナーの呼び込みと後輩への手渡しを手伝ってくれた。もう4回お店を出してきた。1・2・3の数字を書いた割箸を箱から抜いて、折り紙作品の入った外れ無しの封筒を3つの箱の中から1つ自分の手で抜き取る。ただそれだけのお粗末な店なのである(ただし、祭らしく法被は着せてもらっている)。

T君は、恐竜が大好きな園児であった。本を見て作った恐竜では満足せず、とうとう自分で絵を描いて創ることを要求するようになってしまった。閃きの乏しい私なのであるが、彼の希望を叶えるために作品づくりに励んだ。のぞき込んで心配そうに見上げる彼の眼差しに応えるべく2種類の恐竜が新しく誕生した。その一つには、タカヤザウルスと命名する。園児達の尊敬してくれる眼差しや、「先生はどうしてそんなに上手に折り紙が折れるの。お母さんはそんなに出来ないよ」「折り紙先生」「折り紙博士」の言葉のプレゼントがなかったら、きっとここまで続けることはできなかったであろう(ただただ子ども達に感謝感謝のこの頃なのである)。『指先は頭の出店』といってもよい。50歳半ばで始めた折り紙であるが、やってきてよかったとつくづく思う。惚け防止になるよとよく言われたが、まったくその通りであると信じている。これは私の心の財産なのである。包装紙を活用することは、ものを大切に作る気持ちにもつながっていた。四角に切っていくと、どうしても少しはみ出す細い部分が出てくる。デザインが良いと、これも捨てがたい。そこで、この部分も小さな四角の紙にして小さな小さなネズミに変身させる。なぜこんな小さい作品が大きな指先から誕生するのか、折り手の私にも分からない。「それは愛である」と言ったら少々恥ずかしい気

持ちになるが、でも間違いなく身体が指先がしっかりと覚えてしまっている。決して褒められたことではないのだが、園の職員会議でも勝手に手が動き、時々は違う作品になっていることもあるけれど、頭は100%とはいかないが8割以上話の流れをきちんと追っかけている。質問にも適切に答えられた。

何でもそうであるが、折り紙も作品を貰ってくださる方がいるということが、一番の励みになる。私の家族は、町のどこに行ってもお父さん・親父の作品が置いてあるのは恥ずかしいと言う（郵便局、理髪店、クリニック、飲み屋さん等多々）。わが家では止めなさいコールが吹き荒れる中、今日もモクモクと今年のエトのヒツジを折り、脱脂綿をセッセと巻き付けている。この綿を巻くアイデアは卒業生からもらったのだが、4カ月間変形をかけながらそれなりに満足できる作品となり、評判も悪くはないようだ。次はどの人にもらっていたかこうかなと考えている時の楽しさは、格別である。教えてほしいという方がいれば、もっと嬉しい。すぐに四角に切った包装紙をカバンから取り出し直伝である。カバンの中にはいつも包装紙で作った大小さまざまな折り紙用紙・小型のはさみ・くろもじ・セロテープ・糊が納まっている。最近はこれに加え、脱脂綿も仲間入りした。ホテルの部屋の中、新幹線の中、バスの中、果ては宴会場でも折り続けている。ここまで来るともうセミプロ並の活躍である（周りの人は、多分“何この中年は...”という目で見ていてことであろう）。暇があると、いつも手を動かしている。包の中味ではなく包装紙を届けてくれる方も増えてきた。恥ずかしいとは言いながら、有難いことに妻はいつもそれらの包装紙を、大小取り混ぜた四角の紙片にしてくれるのである。私の折り紙づくりにおけるこだわりは、幼い子ども達が喜んでくれるものを生み出したいだけ。それが大人の子どもの心をも刺激してくれるのなら、なおのこと嬉しいのである。ただそれだけの純粋な動機があることを知ってくだされば有難い。折り紙道を極めるなどと思ったことはまったくない。と言うより、そんな事は出来ない相談である。

追記：この約5年間に、ウサギは単独で3000～3500コ、恐竜（5種）もそれ位は折り上げてきた。

自分で言うのもどうかと思うが、やはりこれはすごい事である！

## 2. 折り紙づくりについての私のエッセイ他の紹介

この論文(?)のタイトルを受けて、ここで直ちに“折り紙づくりが療法になりうる”ことを証明すればよいのであろうが、それではあまり面白くないし、そこまではまだ煮詰まってきたてはいないのが現状である。そこで、別の方向からこの折り紙づくりに賭けた5年間の、一緒に追体験してもらい、読んでくださる方に療法になるかならないかを見極めていただきたいと考えることにした。これから取り上げるのは、以下のものに掲載したものであるが、折り紙づくりに関係した一部を抜粋してみたものである。

### ① えんだより

元気いっぱい笑顔いっぱい 一年間の歩み：平成10年度～平成12年度 広島文教女子大学附属幼稚園 1998～2000 より

② 折り紙先生の独り言 2000.10.23の保護者への印刷物

③ 三行短信～北から・南から～

覃思 大心会 … 卒業した大学の学科の同窓会誌に投稿した60字短信 1998～2001

## え ん だ よ り

えんだより12月号の「はじめに」から：平成10年（1998年）12月1日発行 … 1年目

さて次は、私のことです。この4月より園の仕事も兼務となりました。早いもので、もう8カ月が過ぎ去りました。3月の頃は、どのように子どもたちと関わればよいのかについて真剣に悩みました。27年前のように若ければ、2時間位はお相手ができるのですが、50歳の半ばになりますと、もう体力的には自信がありません。そこでハッと閃いたのが折り紙でした。あまり動かないですむということで取り組み始めたのです（その頃に折ることのできた作品は鶴一つでした）。

ところがどうでしょう。次から次に新しい作品を要求してくる園児群団でした。目の前で「今、作って」「今、ほしいほしい」とせがむ子の前で、もう私は立ち往生です。何とかその場をかわすために「明日までに」と約束をしますと、その夜は必死でした。本に描かれている折り方の意味がまったく分からず、頭と指先は分離したままの状況下にありました。それでも四苦八苦／試行錯誤を繰り返していきました。要望に応える為の取り組みのお陰で、どんどん折り紙作品のレパートリーは増えていきました。

11月に入ってからの園児たちの希望は、なんと「恐竜」なのです。紙は2枚いるのです。本の中に取り上げられている恐竜は5種類でした。折り方と紙の使い方さえマスターしておけば怖いものなしです?!難易度は「むずかしい」と書かれていたトリケラトプスがアツという間に折り上がったではありませんか。ならばということで、ティラノサウルス、プテラノドン、パラサウロロフス、ブラキオサウルスと一気に攻め寄せていく快感はいいものでした。「折っておいてね」という注文がたくさん入り、もうそうなれば折り続けるだけです。とにかく折り紙が上達するコツは10も20も30も折り上げることなのですね。

ある日、5種類の大小の恐竜をうす青色の紙の上に立たせていたら、「先生、草がないよ」とか「木がないよ」とか言われたのです。早速その声かけに乗ってしまい、もう終礼の時間にも手遊びを止めず、とうとう恐竜ランドがこの世に一つ誕生したのです（11月18日PM4：00頃）。

えんだより2月号の「はじめに」から：平成11年（1999年）2月1日発行

その2. 折り紙の続編です。私の折った作品を「ほしい、ほしい」というレベルから、『○○したい』『○○を教えて』『こうすれば○○になるよ』という段階にまでのびてきました。主に、年中さんとの間でひろがってきたのは、『動物ランドを作りたい』という男の子グループ（K君、D君、M君、R君たち）の思いです。

また、最近では女の子たちのパワーが男の子を押し退ける形で「花を作りたい」「星を教えて」

という声になり、私の手の内を見ながら一緒に折り上げています。もちろんのこと“花”とは、茎がつき葉もついた秋山方式のものです。ところでびっくりした上に嬉しくなったことがありました。その女の子は一本の花を作り上げた後、しばらくしてから「根もつけたい」と言ってきたのです。これには「ネ」でした（“びっくりしたネ、すごいネ、どうしたらいいかネ”）！

そうそう、折り紙ではもう一つ嬉しいことがありました。1月の誕生会の時、私は左のポケットにスペースシャトルを3つ、右のポケットにウサギを3つ入れておいて、それを出しながらお祝いのあいさつをしたのです。その後スペースシャトルが男の子の興味を引き付けました。この雰囲気の中から、本当にその宇宙というイメージの世界にどっぷりとひたるようになったのがM君でした。その熱心さがご家族みんなにも通じて、とうとう全員で折り紙作り（もちろんスペースシャトル）となったのです。数日後には、M君の折り上げた作品とお礼のお手紙を届けていただきました。

#### えんだより6月号の「はじめに」から：平成11年（1999年）6月1日発行 … 2年目

##### 喜びその2. 飛行機のこと

一年間続けてきた折り紙ですが、折り方を覚えてしまうと欲がでるものです。自分のオリジナルを…と大それたことを夢みるようになりました。そんなある日、一人の男児がやってきました。「じゃる、じゃるを折って」と言うのです。“エッ、何のこと？”「じゃるよ、ジャル」“？”そんなやり取りの折フツと閃くものがありました。“それってJALの事？”「そう！」何と飛行機の事でした。その時は、“作り方を考えてみるからね”ということで別れました。それからがイメージ作りです。アーそうかと気付き、ウサギ・キリンの最初の折り方を当てはめながら挑戦したところ、なんとこれが飛行機らしくなってきたではありませんか。ただし、この作品はセロテープがたくさんいるところが難点です。とにかく10・50・100機と折り続け、セロテープをはりつけていきました。そしてある日の事です。年少さんのお母さんから、「自分が作ったんだ」と言って大事に大事にしていること、近所の方にも持ち出して自慢しているとの話をいただきました。

多分、作品のどこかを折り、私がセロテープをはったのかもしれない。また、逆だったかも。本当に一部分でも自分が分担したということが、彼の大切な宝物に変身したことが分かり、とても嬉しくなりました。作った作品をただ貰うだけでなく、ほんの一部分でも自分がしたという思いが大事なのですね。私は思わぬ心の財産を手にしたのでした。年長さんには見事なスペースシャトルを折れる子どもがいます。昨年彼はどの位の回数をかけて折ったのでしょうか。頑張れD君！

もうひとつの素敵なお話です。何と私あてにラブレターが届いたのです。もう一年生になったHさんからのものでした。

R（弟さん）におりがみをおしえてくれてありがとう。

何とプリクラ付きだったのです。思わず私も返事を書き、封筒の中に2つの折り紙作品を入れてしまいました。そういえば、5月半ば私の机の上にカブトが置いてあったけれど、あれはHさんからのプレゼントだったのです。多分R君がそっと置いていつてくれたのです。HさんR君ありがとうネ。

えんだより11月号の「はじめに」から：平成11年（1999年）11月1日発行

ちょっといい話（本当はとても素敵な話）

その3 折り紙担当者のその後の記録です。これまで折り紙コーナーの中心を占めていた今の年長さん（1年前は年中さん）は、外遊びや自分の遊びが忙しくなり、私の手元を離れていきつつあります。今では年中さんだけでなく、年少さんたちも私を取り囲むようになってきました。年長さんや年中さんには、自分でも本を見ながら折るように話しかけるのですが、年少さんにはまだまだ無理なことです。「ボクも」「私にも作って～」と言われ続けるので、注文を受けながら作ってプレゼントしています。しかし、時々希望のものが貰えなかったり、忘れられて(?)折ってもらえなかったりする子もいるように思います。もし、そんな話を家に帰ってされた場合には、お便り帳にてご一報下さい。

えんだより6月号の「はじめに」より：平成12年（2000年）6月1日発行 … 3年目

最後のお話は……

一人のお母さんが発起人になってくださり、この5月13日(土)と20日(土)に「秋山先生の折り紙教室」が会議室で催されました。2回共16名の保護者の方が参加してくださいました(Tさんのお友だちもきてくださったのですよ!)。初回は振替休日となった小学生も5人参加してくれました。H君のお父さんは2回とも出席して下さり、本当に嬉しかったです。Hさんには2学期に紙飛行機づくりの講師を依頼いたしました。初等教育学科4年生の方にも、未就園児さんのお守りを頼みました。

今度は、園児たちと一緒に折り紙教室を開きたいものですね。

追記。実際にある年中・年長クラスの交流会で、このことは実現しました。親子で、あるいはお祖母ちゃんと一緒に楽しい一時をすごしました。机間巡視でたくさんのペアーに実技指導ができるようになっていました。幼児を相手にしての1時間は記録ものです。もちろん担任の先生も応援してくれました(事前に私の指導を受け、模造紙に作品の作り方を大きく描いてくれていました)。

**折り紙先生の独り言**

2000.10.23

折り紙を始めてから、2年と半年が過ぎました。園児から戴いたニックネームをタイトルに用いさせてもらいました。何事も目標を持ち、一生懸命コツコツと取り組んでいれば、こんなにもたくさんの種類の折り方が身に付くんだなど、我ながら驚いております。“○○○を作っておいてよ”

“これはどうして折るん” “先生はどうしてそんなに本を見なくても折れるの？” “僕も折ってみよう。先生ここはどうすればいいの？” 折り紙遊びにも発達の過程がみえてきます。おねだりの子、「あきやまッ」、「久しぶりじゃね」、一カ月以上経って「頼んだの作ってくれた」（その日に折っておいたのですが、取りにこなかったんですよこのお子さんは。他の子が自分の欲しかった折り紙を持っていたので思いましたね。）クワガタの折り方をマスターしてお母さんをびっくりさせたR君、熱心に折り紙の本をのぞき込みながら折り上げた時の何とも誇らしげな顔々々...いいですね！どれもこれも。「あきやまッ」と親友のように扱ってくれる年中さんには、知らん顔したり、「誰に言っているの？」とよく言います。「親しき仲にも礼儀ありよ」と言いたいのですが、やっぱり自分の仲間を感じてくれるからこう呼ぶんでしょうね。「マーいいか！！」

2年と半年もズーッと折り続ければ、見なくても作品が作れるんですよ。継続は力なりなんですね。今はやり続けてよかったなと心底思います。日には50~100も折らねばならない時もあり、なんでこんな事を始めたのかと自分が自分を恨んだりしたものでした。でも子ども達の目が、言葉がここまで私を導いてくれたのだと感謝しています。まさに園児一人ひとりが私の先生なのです。その先生方が“上手に折れるね”，“ほうよ，こんなが欲しかった”，“あきやま，〇〇頼んだで”，“今度はいつ来るの”，“貰った折り紙は宝箱に入れてみんな持っているんよ”.....。このように言ってくれる園児の顔が声が頭に浮かびます。「アッ，彼の頼みを忘れていた」と思い出したり，年少さんの欲しいのだけれど自分から言い出せず，少し離れたところから，指をくわえてジッとみている姿を思いだしながら，とにもかくにも折り続けてきました。秋祭り（10/28）には，無料くじ引きコーナーを担当します。もちろん賞品は「折り紙」です。お出かけください，首を長〜くして待っていますよ。

### 三行短信～北から・南から～

54になって附属幼稚園の仕事も兼務。全身で30分も園児と遊べばグロッキー。苦肉の策が折り紙。これならあまりくたびれない。 — 1998年 —

附属幼稚園の兼務も2年目。絶えず動かしている両手は折り紙づくり。園児並には進化したかな。ボケ防止にはうってつけですよ。 — 1999年 —

21世紀を前にして大学は教育・研究体制の中味を問われた。身も心も誠に疲れる日々の中一時の安らぎは園児達との折り紙交換。ホッ — 2000年 —

心理学を学び始めて40年。その私が仲間と心理学科を立ち上げた！驚きでしょう。折り紙は3年半，ただひたすら折り続ける日々！ — 2001年 —

### 3. その後の折り紙づくりについて

— 問う：はたして折り紙療法への道は切り開けるものなのだろうか —

#### その1. オープンキャンパスでの取り組み

2001年3月に申請し5月に認可された心理学科の募集は、遅れて6月からのスタートであった。私も始めて心理学科のブースを担当した。正式には私一人がこの時点では専任教員であった。キャンパスを訪問してくれる生徒さん達には、時間的な波がある。緊張が緩んだ合間には、いつものように指先が動いて折り紙作品が誕生していく。そんなある時、友人が隣のブースで説明を受けている間、女子高生が立っていたので、「あなたも折りませんか」と誘ってみた。一緒にウサギ等を折った。そして半年後、彼女は心理学科の1期生として入学してくれた！2002年度には、5名の教員全員が心理学科の説明・出し物に参加。私は、2号館2Fの心理実験室で簡単な実験コーナー（2つ）と共に折り紙コーナーを初めて開いてみた。隣のプレイルームでは、いつものように箱庭の制作コーナーと先輩との話合いコーナーが設けてあった。2回の行事とも息をつく暇もないくらいたくさんの生徒さんや保護者が座られ、折り続けていた。そこには、7～8人に一度に目配りしながら指導している私があった。

#### その2. ある心の病院に附属する生活訓練施設の冬祭りに参加

2001年12月、その施設長にお願いして私が作った折り紙作品をもらってもらうコーナーを設けてもらった。2時間の間にいろいろな方々がもらってくださった。クワガタをプレゼントした若者は、施設長にもらって嬉しいと話してくれていた。2002年の12月には早めにお願ひして、一緒に折るコーナー（折り紙教室）を設けてもらった。将棋大会が長引き、ビンゴ大会が30分以上延びたため、13：30～14：30まで教室を開いた。冬祭りの終了は15：00であった。若いお嬢さんと、娘さんが付き添った中年のお母さん、それに成人男性が2名参加してくださった。どれだけ参加してもらえるか分からなかったので、随分とたくさん作品を折って持ち込んでいた。ヒツジはあと綿を巻くだけでいいように準備していた。まず、ウサギ折りからスタートさせた。お母さんがすぐに頭痛を訴えられたので、そっと目の前にたくさん作品を置き、持ち帰ってもらった。成人男性の方々は少しおかしなウサギに仕上がったが満足されていた。手直しをしてあげるとびっくりされた。ゾウ、サイ、カバ、ウマなど大型の作品を差し上げた。娘さんはズーッといろいろ折り続けた。そしてヒツジに綿を巻いてあげると大喜びだった。またまたたくさん折ってきた作品をプレゼントした。時間が切れかかる頃、少し痴呆のあるお年寄り（女性）が私に、「ヒツジ折ってください」と四角の包装紙を1枚手渡された。出来た作品に綿を巻いて差し上げた。時間は15時を当に過ぎていた。指導員の方が乱れた紙を集めてくださっている時、その年老いた女性の方も一つひとつ丁寧に集めて手渡してくださった。私は、その方の幸せを心の中で祈った。きっと忘れることのない思い出になることだろう。

年末、施設長から手紙が届いた。「後日、“秋山先生が来られたのなら、祭りに来れば良かったー”

など残念がっているメンバーさんもおられ、又、当日、参加された方からは、“おもしろかった。紙一枚で何か作れるなんてすごいね！”等の声も聞かれ、本当に大好評でした。先生がお昼をとりながら作られた作品も施設で飾らせていただいております。来年の羊は、特に評判が高い様です」すぐに感激してしまう私は、やってきて良かったと心底そう思ったのである。

折り紙に熱中すると、アツという間に2時間位は過ぎる。そして手元にはどんどん折り上げた作品が溜っていく。慣れてくると、20～30コ位は軽く仕上がる。その後も続けることができるかは、それらの作品を貰ってくれる人達がいるかどうかにかかってくる。それも喜んで…。また、飾って一定期間が過ぎたなら、心を込めて処分することである。折り始めた年は、ウサギ年であった。以来、集中してエトを折り上げては貰っていたいたり、玄関・床の間・本棚等に飾って置いた。そして一年後、心を込めて解体処分する。折り紙づくりの作業は、思いやりといたわりの世界でもある。「作る」から「処分」までのプロセスのすべてが、折り紙のタイムと考えたい。心から楽しみ、心を和らげ、心に潤いをもたせ、そして心を込めて処分するまでの一貫した作業を内包しているのが折り紙づくりなのである。故に、工夫さえしていけば、療法の一つに加えることができるかもしれない。折り紙作品は、生命を吹き込まれた生き物であると思っている。どうだろうか、皆さんは折り紙づくりが本当に作業療法みたいな治療効果を持てると思われるだろうか。今の私にはまだはつきりとは分からないのである。

## 文 献

桃谷 好英・桃谷英樹 2001 新・おりがみランド 動物のおりがみ 誠文堂新光社

高橋 春雄 1968 おり紙きり紙全集 泰光堂

山口 真 1993 やさしいおりがみ百科 西東社

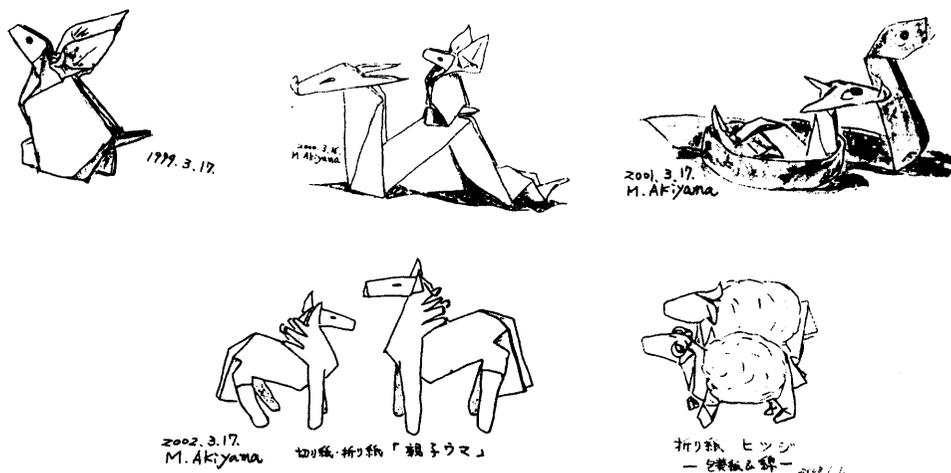


図3 1998～2001年度の卒園文集「ちいさな芽」贈ることばのカットと2003年元旦の年賀状のカットより